

## + 10 【さねとも】

この話は、懐爺からきいたときには、ちんぷんかんぷんだったのですが、それから十年経って、(つまり完ちゃんが【まるのみおんな】のお腹から飛び出してきた年に)、歴史の本を読んでいたときに思い出したものです。

懐爺は、非業(ひごう)の死を遂げた偉人(いじん)が、後々おばけになってでてくるという話をしてくれたのですが、【よしつね】【のぶなが】【りょうま】などは、たしかに偉人のおばけということで、納得はできたのだけれども、【さねとも】だけはちんぷんかんぷんでした。

とにかく鎌倉時代の三代将軍というだけで、偉人とはおもわれなかったから、よけいにわからなかったのでしょう。

けれども歴史の勉強をすると、源実朝は偉人だったとおもわざるを得ません。

歌人としてはもちろんのこと、人間としても偉大だったとおもわれるのです。

実朝は一二一九年冬の夜、兄頼家の遺児、公暁(くぎょう)に鎌倉八幡宮(かまくらはちまんぐう)で殺されます。

いまでいえば二十六歳の若さです。

その際、公暁は「おやのかたきはかくうつぞ」といったそうですが、親の仇とは濡衣(ぬれぎぬ)で、それは公暁のおもいこみか、だれかにそそのかされたということです。

この日は雪でしたが、右大臣拝賀(はいが)の儀式があり、実朝は、館を出るときこんな歌を残しています。

出でていなば主なき宿と成りぬとも軒端の梅よ春を忘るな

実朝は本歌取(ほんかどり)の名手といわれていましたが、本歌取とは先人の有名な歌の一部を利用して作る歌のことです。

例えばその歌は、菅原道真(すがわらみちざね)のこんな歌。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

式子内親王（しきしないしんのう）のこんな歌。

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅はわれを忘るな

そういうものから取っていて、だから遺書のつもりではないとする説も有力なのですが、こんな事実も残されています。

重臣の大江広元（おおえひろもと）が、拝賀の儀式に向かおうとする実朝を前に、なぜか、落涙を抑えることができなくなり、束帯（そくたい）の下に武具の腹巻をつけるよう勧めたものの、近臣の源仲章（みなもとのなかあき）が、そのような例はないとしりぞけたという。

また実朝は、結髪のために、側で奉仕していた宮内公氏（みやうちきんうじ）に、形見として鬢の毛を一本抜いて与えたという。

また実朝は、牛車をおりるとき太刀を（意図的か偶然か）突き折ってしまったという。

執権（しっけん）の北条義時（ほうじょうよしとき）は儀式の途中で体調が悪くなり、先に引き上げたという。

これらの話を総合すると、すくなくとも実朝は、この日自分の命が終わるだろうとの、予感なり予測があったという他はありません。

大昔の資料は、時の権力者の意向が大なり小なりこめられているもので、この場合は執権北条氏なのです。

だから大江広元の涙も信用できないし、時の最大権力者である北条義時の動きも不審です。

それでも、いやそれだからこそ、実朝は自分の末期を察知していたとおもわれます。

わかっている死地におもむく人物が、偉人でないわけではないと、ぼくには強くおもわれたのです。

そして、大江広元の落涙には大きな意味があり、太刀を突き折ったのは実朝の意図であると、ぼくにはおもわれました。

ところで、こういう人物のおぼけとは、どんなものであったのでしょうか。

ぼくの体験では、声だけで、姿は見えませんでした。

三度体験したけれども、三度とも雪のふる寒く暗い日でした。

これでよかったのか

これでよかったのだろう

これでよかったとおもうべきだろう

これでよかったというしかない

そういう声が、大山から吹き下ろす雪まじりの風によって、ぼくの耳を打つのです。

それは天からのやわらかいやさしい声にも聞こえたし、地からの響き渡るおそろしい声にも聞こえるのです。

それから、歌が詠じられます。

ものいわぬ四方（よも）の獣すらだにもあわれなるかなや親の子を思う

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

ぼくがその体験を話すと、懐翁は即座に、

「【さねとも】です」

といったものです。

「【さねとも】かい。おそろしくて、やさしかったぞ」

「それが【さねとも】です」

懐翁はまたいいました。

「けだものにもやさしいのは、ほんとうにやさしいひとだからだのう」

「それが【さねとも】です」

懐翁はまたいいました。

懐翁はきっと【さねとも】がすきなのです。

「やっぱりおばけのなかまかのう」

「仲間どころか、おばけの将軍です」

「しょうぐんかい。えらいおばけじゃのう」

「はい。えらいおばけは、威厳（いげん）だけで人に恐怖を与えます」

「われてくだけでさけてちるのは、いげんかのう」

「威厳のひとつでしょう。わたしらはそんなにしなくとも散ってしまいますから」

「もつとも、おぼけの将軍は【さねとも】だけではありません。【まさしげ】も【ゆきむら】も【たかもり】もそうです」

「みんなりっぱななまえじゃのう」

「はい。偉人のおぼけ、おぼけの将軍は、立派な名前だから」

「だから」

「だから、おぼけになるのです」

「かいじいとかきんちゃんでは、だめじゃのう」

「はい。懐爺はだめですけど、金ちゃんの名前は金之助ですから、立派な名前です。充分（じゅうぶん）おぼけの将軍になれるす」

「おぼけ【きんのすけ】かい。かんちゃんは、おぼけの【かんとろう】かい」

「完太郎では、残念ながらおぼけの将軍にはなれません」

「ざんねんじゃのう」

けれども、完ちゃんは二十歳のとき、芸名を武田一完としたから、充分おぼけの将軍になる名前となったのでした。

そういえば懐爺は、ぼくとまったく同じ体験をしていたといっていました。

でも【さねとも】ではなくて、【さいぎょう】だったそうです。

願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ

西行は実朝より以前の歌人で、この歌のとおり非業の死を遂げた人物ではないので、ぼくは首をかしげましたが、懐爺いわく、西行は出家をしたときにすでに非業の死に近い感情を味わったのだと説明していました。

ちなみに懐爺が耳にした歌はこういうものでした。

心なき身にもあはれは知られけり 鴨立沢の秋の夕ぐれ

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ

年たけて又こゆべしと思いきや命なりけり 小夜（さよ）の中山

ぼくは【さいぎょう】のおばけにも遭遇したいと念じたものですが、  
残念ながら叶いませんでした。